

平成30年12月5日発行(毎月5日1回発行)  
第58巻12月号(30巻713号)

# 風土



12

ストーブに燈油を足すも起居たちいかな

（句集『高蘆』より昭和四十四年作）

俳人協会発行の『石川桂郎集』（平成六年刊行）に手塚美佐氏が、この句に註を付けているので紹介します。「七畳小屋の暖房器具は、丸型デザインを何十年も守り続けている英国製のアラジンブルーフレームだった。点火、消火のさい無臭なのが気に入って自分の手で掃除し、大事に扱っていた。ストーブの上に鍋をのせて湯豆腐をたのしむこともできた。」桂郎師のこだわりがよく出ており、「起居」は「燈油」を足すだけではないことも解ります。

飲み水を雨足す見つ古曆

（句集『高蘆』より昭和四十五年作）

この「飲み水」は七畳小屋の外厨に置いてある飲料用のバケツの水のことです。汲み置きの水にさらに冬の雨が降り注いでいます。天水もまた佳しとバケツを見つつ、あと幾日もなくなった「古曆」に目を移しているのです。振り返るとこの年には肺炎で二度ほど倒れ、また十一月には師の波郷を失っています。桂郎師の胸を目まぐるしく走るものがあつたはずで

萩刈つて桂郎忌まで焚かずおく

(句集『幻』より平成六年作)

この句は平成六年作ですので、桂郎師が逝ってから二十年近くになろうとしています。しかし桂郎師への思いは薄れるどころか折に触れて器師の句の中に登場します。桂郎師は丁度萩の枯れる頃亡くなりました。『二代の薨』の「身をもんで一夜に枯るる萩の丈」の絶唱がそれをよく表しています。十一月六日の忌日に萩を焼き、師と語りうと置いてあるのです。

大白鳥羽撃くときは水に立つ

(句集『幻』より平成六年作)

この句は、白鳥の飛翔の最初の動きを捉えたものです。水鳥は水面を助走して飛び立ちますが、大きいものほど助走距離が長くなります。白鳥はまず羽を大きく揺らし、徐々に浮力をつけて立ち上がり、水面を蹴り上げながら飛ぶのです。その様子がスローモーションの映像のように描かれています。

落し水

南うみを

朝刈や青花の露うち飛ばし

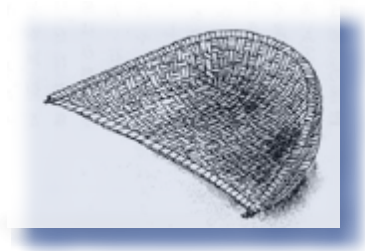
刈草をずらすやちちろゐるはゐるは

無花果もぐ葉うらの闇に腕ぬらし

鳩寄せて散らし敬老の日の老人

夜あがりの茎ぬめぬめと曼珠沙華

ぬかご摘む若狭の酒は竹筒に  
宮入りを鉦が急かしぬいわし雲  
宮入りの笛にひと吹き新走り  
すつぽんのもんどりうつて落し水  
真ん中に溶岩据りたる棚田刈  
蜘蛛の糸月のあばたを過ぎりけり  
やはらかくなりたる秋の扇かな



# 竹間集

同人作品



牡丹焚く

田村すゝむ

新涼や振つて音生むハンドベル  
「新酒あり」蔵元の酒林  
洗礼の名はルミと言う秋扇  
丑三つに胡弓が鳴いて風の盆  
牡丹焚く彼方に神蔵器かな  
円楽も歌丸も亡し秋の声  
光琳の「風神雷神図」秋深む

与謝越え

田中佐知子

与謝越の雨に香のたつ葛の花  
復元の須恵器に隙間秋暑かな  
秋七草挿せば野の風生れにけり  
秋宵の対橋楼に晶子の間  
閉ぢられぬ一花あしたの醉芙蓉  
秋風や人逝きて句碑残さるる  
露の世の「未来」てふ語の眩しかり

秋 祭

中村洋子

東京の最も暑き厄日かな  
秋天へ倒立の足揃へゆく  
教室の窓みな開く九月かな  
鼓笛隊縮みて止まる秋祭  
参道は奥の院まで露しとど  
高原は胸の丈まで秋桜  
こほろぎの初音で閉ぢる日記かな

聞き役の

橋添やよひ

朝焼けの雲迅くなる厄日かな  
供へある野菊遊女の塚とのみ  
炊きあがる新米の香の二階まで  
聞き役の十指あそばす夜長かな  
風の出て花火佳境に入りにつけり  
空也念仏色なき風の行方かな  
天高し禪寺の碑の養生訓

草は実に

浅田 光代

赤い羽根つけ登壇の咳払ひ  
をみなごは人捕るあそび秋の昼  
コスモスがわつと活断層のうへ  
待宵やすこし汚れて猫戻る  
雁渡し菓子の包みの蘭船図  
亡き母の一行日記草は実に  
秋蝶と山上駅で別れけり

秋刀魚焼く

柿沼 盟子

八千草の花咲く地下に遊水池  
一鉢にいつまでもをる秋の蜂  
肩紐の捻るる鞆秋暑し  
鯖雲や高圧線は峰を越え  
冷ます間に枝豆数を減らしをり  
秋分やまだ上を向くくわりんの実  
帰り来し顔を見てより秋刀魚焼く

今日の月

高村 令子

今生の十指を膝に月迎ふ  
添ふ星も追ふ雲も無し望の月  
満ちてゐてどこか翳持つ今日の月  
杖の身に椅子を賜はる良夜かな  
譲られし木椅子の温み月の宴  
語らひも何時しか途切れ今日の月  
死は常に片辺に月のまどかなる

# 山河集

同人作品



南うみを選

大櫛上に器の月の道

井口ふみ緒

衣被つくづく父の背中かな  
コスモスの中よりぬつと猫のかほ  
常備葉のみ易くして台風裡  
子と歩む十六夜賢治の里にかな

夏深しカレーのルーの割れやすく

島 玲子

一日の終はり厨に麦茶の香  
くるぶしに草の風受く秋彼岸  
やや早き一人の夕餉芋茎剥く  
新涼や若き教師の島に馴れ

中嶋 陽子

二百十日肉に巻く糸固く締め  
先斗町の路地に灯の入る衣被  
相席の器 先生 衣被

音大ゆアリア漏れくる鰯雲  
秋の海胸に遺骨のペンダント

石膏の背なは空つぽ台風過

奥田 茶々

向き換へる坊ちやん列車鰯雲  
稲妻の闇に走りし神經痛

宵越しの少し皺よる衣被  
今はもう回らぬ水車蕎麦の花

舞殿に蝶のもつれて萩の宮

渡辺 やや

白無垢の裳裾にゆれて萩の花  
赤い羽根つけてパンダのぬひぐるみ

いちじくの皮あるやうなないやうな  
爺が鋤き婆が種まく秋うらら



# 風土独語／南 うみを



台風過埴輪は眠る眼を持たず

赤石 梨花

「台風」と「埴輪」は直接の関係はありませんが、埴輪のがらんどうの眼を想像すると、激しい風雨にひたすら目を見開いていたようにも思われます。埴輪の主を守るために眠らないのです。

衣被つくづく父の背中かな

井口ふみ緒

「衣被」は里芋の子芋や孫芋の小さいのを、皮のまま茹でたり蒸したものです。農家では子供のおやつでした。作者は「衣被」と父の背を重ねていますが、よほどの思い出があるのでしょうか。素十の「端居してただ居る父の恐ろしき」ではないですが、厳格な父親の大きな背中が見えます。

桂郎の好みぞ塩の衣被

佐野つたえ

これも「衣被」の句ですが、石川桂郎と重ねています。桂郎は酒好きと共に食通でした。酒の肴には何と言っても塩だという桂郎の嬉しそうな顔が見えます。

くるぶしに草の風受く秋彼岸

島 玲子

この句は「くるぶしに草の風」が巧いです。「秋彼岸」の頃の草の丈を想像させ、墓への道の在り様も解ります。

硝子戸は研かれ子規忌すでに過ぎ

平田きみこ

子規の忌日は九月十九日です。僅か三十五歳で亡くなりましたが、俳句、短歌の革新を成し遂げました。この句は意味づけするのではなく、綺麗に透き通った硝子戸に子規の精神を感じればよいのです。「すでに過ぎ」とずらしたところが佳いです。

秋の海胸に遺骨のペンダント

中嶋 陽子

「遺骨のペンダント」にどきりとしますが、故人の一部と肌身を共にすることを考えればこれほどの強い想いはないです。「秋の海」の静けさに佇み、思い出にひたる人物が見えます。

聞き上手菊なますへと箸のぼす

小山 寿子

「菊なます」は菊の花弁をさつと茹でて三杯酢であえたもので、しゃきつとした歯触りとほろ苦みを楽しみます。いくなれば風流な大人の味です。この「聞き上手」の人間性が伝わってきます。

稲妻の闇に走りし神経痛

奥田 茶々

映像としての「稲妻の走り」から、痛覚としての「神経の痛み」の走りへ転換させたところに、機知の面白みが出ています。

看取りとは許し合ふこと秋の雨

西田小夜子

「看取る」者と「看取られる」者との関係を「許し合ふ」ことだと悟りました。生半かな想いの認識ではありません。死に至る病という現実が生んだ言葉です。「秋の雨」も的確です。

# 風土集



## 南うみを選

赤のまま歩き初めの児の三歩 千葉 上村 葉子

新涼やアルトサククス胸に聴く  
送り火や元号四つ生きし父母  
角ばつて男踊りの風の盆

秋暑しあごに張りつくオブラート  
滝の水岩に沿ひ来てうすみどり 阿南 島 玲子

夏を病み母に近づく思ひかな  
炎天と言ふ静けさのありにけり  
出勤のナースへがばと水を打つ  
落伍することも楽しき花野かな  
墮ちし蛾の翅震はせて蟻弾く

舞鶴 谷田明日香

風に乗り田の一枚を蝗飛ばす  
棚経に今朝の門扉は開いてをり  
閑伽水をペットボトルに墓参り  
電車にて正座してゐる半ズボン

遊行寺の本堂広き夏書かな 横浜 赤石 梨花

処暑の風鎌倉古道吹き通す  
新豆腐沈めて火星接近す  
初秋やワイングラスの脚長き

房総に醬の匂ひ秋に入る  
盆棚に子の文机を借用す 水戸 山田 健太

諸掘りの園児はすでにうでまくり  
馬追の飛び損ねたる広辞苑  
園庭の花圃のひとつはめ組です  
我ミート妻ナポリタン今朝の秋

人去りし部屋の広さやつくつくし 舞鶴 塩尻 きぬ

秋の日やミニ豚小さき尻尾振る  
葡萄棚名残りの房の下がりをり  
秋うららポニー無心に草食めり  
よき日和穂紫蘇に羽虫飛び交つて